The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢者の社会参加と主観的幸福感に関する比較社会学的研究
Author(s)	崔, 煌
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/85313
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　CHOE HWANG　）	
論文題名	高齢者の社会参加と主観的幸福感に関する比較社会学的研究

論文内容の要旨

本稿の目的は日本と韓国における高齢者の社会参加とそれが両国の高齢者の主観的幸福感に与える影響を①ソーシャルキャピタル、②ソーシャルサポートによる緩衝効果、③向社会的行為の観点から比較し、それが日韓両国における高齢者の社会参加に示唆するところを明らかにすることである。

第 1 章は研究背景である。1 では日本と諸外国における高齢者の社会参加研究の動向、2 では比較対象としての韓国の有効性を、3 では本稿の全体的な構造を紹介した。

第 2 章と第 3 章は先行研究のパートである。まず、第 2 章では高齢者の社会参加の定義とその主観的幸福感との関連を紹介し、第 3 章では現代日本と韓国の社会比較を行った。第 2 章の 1 では高齢者の社会参加の定義とその範囲、2 では高齢者の社会参加と主観的幸福感に関する理論を述べ、3 では高齢者の宗教参加と主観的幸福感に関する理論を①ソーシャルキャピタル、②ソーシャルサポートによる緩衝効果、③向社会的行為の順に紹介した。第 3 章の 1 では日本と韓国の二国家間比較の意義を、2 では日本社会と韓国社会の類似点を東アジアにおける後発産業国家としての観点から述べ、3 では日本社会と韓国社会の相違点を戦後アメリカによる異なる宗教政策の観点から紹介した。

第 4 章から第 9 章は量的データによる分析パートである。第 4 章では日本と韓国における高齢者の社会参加形態とその主観的幸福感との関連を確認した。その結果、日本とは異なり、韓国では宗教団体は上位の社会参加の 1 つとなっていることが分かった。また、日本においては高齢者の地縁組織への参加が主観的幸福感と関連があるが、韓国においては高齢者の宗教団体への参加と主観的幸福感の関連が確認された。第 5 章ではソーシャルキャピタルに着目し、それが日本と韓国における高齢者の社会参加と主観的幸福感にどのような役割を果たすのかを確認した。分析結果、日本の高齢者の場合、地縁組織への参加と主観的幸福感との関連を確認され、ソーシャルキャピタルの個人的側面と集合的側面を経由して主観的幸福感との関連をもつことが確認された。韓国の高齢者においても、地縁組織への参加はソーシャルキャピタルの個人的側面と集合的側面との関連を示すが、主観的幸福感との関連は有意ではなかった。宗教の団体や会への参加の場合、いずれのソーシャルキャピタルとも関連をもたなかった。第 7 章では日常生活動作の自立度による高齢者の社会参加と主観的幸福感の関係を調べた。日本の場合、日常生活動作の自立度と社会参加による相互作用効果は認められなかったが、韓国の場合、日常生活動作において問題を抱える高齢者がそうではない高齢者に比べ、敬老堂、老人福祉館への参加が主観的幸福感に与える影響がより大きく、宗教団体においては仏教においてのみそのような効果が示された。第 8 章では、高齢者の社会参加と配偶者からの情緒的サポートに着目した分析を行った。日本の場合、いずれの社会参加も配偶者からの情緒的サポートと社会参加による交互作用効果が認められなかったが、韓国の場合、配偶者からの情緒的サポートが十分に得られない高齢者がそうではない高齢者に比べ、宗教団体（仏教）への参加が主観的幸福感に与える影響がより大きかった。第 8 章では日本における高齢者の地縁組織への参加と寄付活動に着目した分析を行った。分析結果、高齢者の地縁組織への参加が主観的幸福感に影響を与える際において、寄付活動を経由することが確認された。第 9 章では韓国における高齢者の宗教団体への参加とボランティア活動に着目した分析を行った。その結果、宗教団体（仏教、カトリック、プロテスタント）への参加が主観的幸福感に影響を与える際、ボランティア活動への参加頻度を経由することが確認された。しかし、カトリックとプロテスタントの宗教団体への参加は将来におけるボランティア活動への参加希望を経由して主観的幸福感に影響を与えることに対し、仏教においてはそのような間接効果が認められないことから、ボランティア活動への参加希望においては宗派によって、間接効果の差が存在することが明らかになった。

第 10 章の結論パートでは先行研究と分析結果をもとに考察を行った。1 では本稿の先行研究をまとめて紹介し、2 では第 4 章と第 9 章の分析結果を再度確認した。3 では分析結果の意味を考察し、4 では本稿の限界と意義および高齢者政策へのインプリケーションについて述べた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　CHOE HWANG　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	川端　亮
	副 査　教 授	吉川　徹
	副 査　教 授	斉藤　弥生

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本と韓国の高齢者の社会参加の状況と社会参加が主観的幸福に及ぼす影響を明らかにするものである。高齢者の社会参加は、ソーシャル・キャピタルを得ることができ、ソーシャル・サポートを発生させて困難な状況に置かれている高齢者の苦難を和らげる緩衝効果をもたらし、ボランティア行為や寄付行動などの向社会的行為を促すことによって、それぞれ主観的幸福に影響するという観点から検討し、両国の高齢者の社会参加についての実践的な示唆を試みる。

まず、比較対象となる日本社会と韓国社会の社会階層構造、人口構造、福祉制度の類似した点が指摘される。農地改革による大規模な小作農の自作農への転換、教育機会の拡大、労働集約的な製造業を中心とした急速な産業化、人口の高齢化、福祉国家としての後発であることなどが詳述され、福祉への社会支出が韓国よりは日本が大きいこと、福祉国家を導入した時期が韓国の方が20数年遅れることなどの指摘の後に、両者のもっとも大きな文化的な違いとして宗教文化が異なることが指摘される。第二次世界大戦後のアメリカの統治下での宗教政策の違いが詳細に述べられているが、これは非常に興味深く、価値がある記述である。

日本と韓国のデータを基にした分析では、両国とも性別、年齢、学歴などをコントロールしても積極的に社会参加している人は、主観的幸福感が高い。しかし、日本の場合は地縁組織への参加が主観的幸福感を高めるが、韓国では宗教団体への参加が主観的幸福感を高めることが明らかになった。また日本では地縁組織とボランティア・NPOへの参加は、ソーシャル・キャピタルを経由して主観的幸福感を高めること、韓国では、地縁組織も宗教への参加もソーシャル・キャピタルを媒介しないことがわかった。

ソーシャル・サポートとの関連では、日常動作の自立度に問題を抱える場合、韓国では余暇活動の福祉施設、福祉会館、仏教への参加がソーシャル・サポートの緩衝効果が見られたが、日本ではそれらの効果は見られなかった。配偶者からの情緒的サポートが得られない場合、韓国では仏教への参加が緩衝効果を示したが、日本では緩衝効果は見られなかった。

寄付行動に関しては、日本では地縁組織への参加は寄付を経由して主観的幸福感に影響を与える。韓国では宗教への参加がボランティア参加を介して主観的幸福感に影響を与えることがわかった。

日本も韓国も地縁組織への参加が高齢者の主観的幸福感を高める。韓国ではそれに加えて宗教への参加が主観的幸福感を高める。宗教への参加が日本と違い、宗教参加が多いのは戦後のアメリカの統治政策の結果である。そして、高齢者福祉が不十分な韓国では、宗教団体への参加が重要な役割を果たしているのである。

本論文は、高齢者の社会参加と主観的幸福感の関連はソーシャル・キャビタル、ソーシャル・サポート、向社会的行為の3つの社会学的要因が影響していることを丁寧な二次分析によって、明らかにしている。とくに韓国では、日本には見られない宗教集団への参加の果たす役割があり、それはアメリカの統治政策の結果であることも興味深い指摘であった。また、日本においては地縁組織が主観的幸福感に大きく影響しているが、地縁組織は次第に弱くなっていく可能性が高い。弱くなった地縁組織が高齢者に主観的幸福を与え続けられるかどうかは不明である。そのようなときに、韓国社会での地縁組織とともに宗教団体への参加が高齢者への主観的幸福に影響していることは参考になるだろうという示唆を述べている点も研究の価値として高く評価できるだろう。

以上の点で、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。